POLE

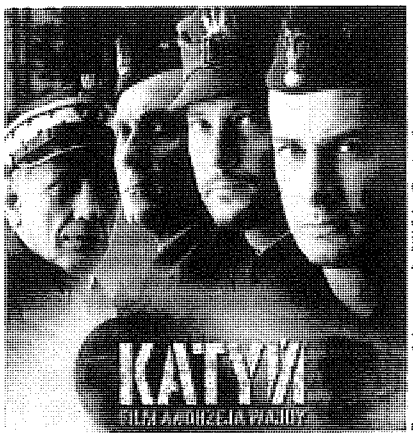
北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第６４号　2009.3.1

発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2－16
佐光伸一
電話・FAX　011-727-1520

アンジェイ・ワイダ監督「カティン」を観て

佐光伸一

ポーランドを代表する世界的映画監督アンジェイ・ワイダは、「地下水道」、「灰とダイヤモンド」などの名作により日本でも映画ファンの間で広く愛されてきた映画人のひとりです。しかし日本では二〇〇〇年にポーランドの詩人アダム・ミツキェヴィチの韻文小説を映画化した作品「パン・タデウシュ」（邦題「パン・タデウシュ物語」）が封切られた後、しばらく彼の名前を耳にすることはありませんでした。しかし昨年、ワイダが「カティンの森事件」をテーマにした新作で、アカデミー賞の外国語映画賞にノミネートされたというニュースが突然飛び込んできました。またそれにあわせて、NHKで「アンジェイ・ワイダ祖国ポーランドを撮り続けた男」というドキュメンタリーが放送され、八十三歳になった今も旺盛な創作活動を続けている姿を、日本のファンの前に見せてくれました。ワイダの新作「カティン」（二〇〇六年）は、日本では一般公開はまだ先ですが、二〇〇九年二月七日に開催された当協会の第五十四回例会で、大使館のご好意により一足早く映画を上映することが出来たので、簡単に映画の内容と見所を紹介したいと思います。



ワイダの最新作「カティン」

「カティンの森事件」という歴史的に非常に大きくまた難しい問題を題材に、ワイダが新作を撮ったと聞き、私は正直少し不安になりました。それには理由があります。私がクラクフに留学していた二〇〇〇年に、ワイダがアカデミー賞の名誉省を受賞したのを機に、ウッヂの映画大学時代の卒業制作から「パン・タデウシュ」まで彼の全作品を二週間かけて上映するという催しがありました。ポーランド映画、とりわけ初期のワイダ作品に心酔しポーランドへ留学した筆者は、大学の授業をさぼり、二週間映画館に通いつめ、テレビ映画も含め五十本以上におよぶ彼の作品すべてを観賞する機会がありました。日本では公開されていない隠れた名作を発見できるのではと内心ひそかに期待していましたが、残念ながら期待を大きく裏切られる結果となりました。とりわけ、歴史をテーマにした作品に凡庸な作品が多いという印象を持ったので、今回は作品のテーマも大

オスカーを受賞するワイダ

きいだけに、私もその分大きな不安を持って、この作品を見ました。しかしその予想は今度は逆の意味で裏切られました。「カティン」は、「世代」、「地下水道」、「灰とダイヤモンド」といった初期三部作と並ぶ傑作であり、二十一世紀のポーランド映画を代表する新しい名作となるだろうと確信を持ちました。まず、「カティン」のあらすじを紹介し、それから「ロマン主義」、「ポーランド的テーマ」「幼年時代」、という切り口で映画を振り返ってみたいと思います。

まず題材となっている「カティンの森事件」ですが、これは第二次大戦初期にソ連軍の捕虜になったポーランド人将校たちが、ロシア西部スモレンスク近郊のカティンの森でソ連軍により大量虐殺された事件です。ソ連は、この事件をこの地域を後に占領したナチス・ドイツの仕業としましたが、ペレストロイカによりソ連でも歴史の見直しが始まり、ゴルバチョフはソ連軍の関わりを認め、ポーランド政府に謝罪しました。そしてワイダの父ヤコブも虐殺された数千のポーランド人将校のひとりだったというのです。彼は日本でのインタビューで次のように語っています。「私は、開戦以来、父の姿を見ていません。父は一九四〇年にソ連領内のカティンの森で数千のポーランド軍将校とともに虐殺されていたのです。（中略）母は信じませんでしたが、最終的に父以外には考えられないということになりました。いうまでもなく、父はまだ帰ってきていません。」（『ワイダの世界―映画・芸術・人生』、岩波ブックレットNo.一〇七）。映画では、捕虜として連行されていくポーランド将校たちの物語と、将校の家族の物語が並行して語られます。主人公となっているのは、夫の生存を信じる将校の妻です。監督自身インタビューで「とてもパーソナルな」映画と語っているように、この主人公はワイダの母を投影した人物であることは間違いないでしょう。しかしその女性の子供を息子ではなく娘にしたこと、またこの事件を取り巻くさまざまな人物を登場させたことにより、単なる自伝的な作品に陥りことを免れています。カティンの真実を知りながらソ連軍に仕え、良心に苦しみ自殺するポーランド人将校、ロシア人でありながら主人公一家を助けるソ連の軍人などを通じ、複雑な人間心理を描写することにも成功しています。戦争映画にありがちな勧善懲悪的な世界観を脱却していることにより、この映画がポーランド人を超えわたしたちに普遍的に訴える力があるように思います。

「カティン」より

それでは、初期三部作（「世代」、「地下水道」、「灰とダイヤモンド」）や「カティン」などを例外とし、彼の歴史ものに凡庸な作品（たとえば「戦いの後の風景」、「鷲の指輪」、「聖週間」など）が多いのはなぜでしょうか？それはワイダの歴史に対するロマン主義的な態度が原因になっていると思います。ポーランド祖国や民族に対する自己犠牲の精神です。「地下水道」、「灰とダイヤモンド」の主人公たちの歴史における破滅的な行動を見れば一目瞭然です。ワイダはインタビューの中でこれに関し興味深いことを語っています。「わたしの映画に登場する主人公たちの行動

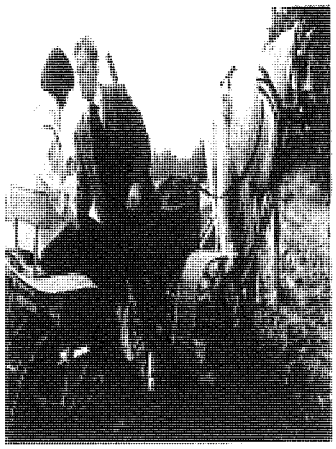
を理解するには、こうした特異性を理解する必要がある。彼らは、ポーランド・ロマン主義的発想の直系の継承者なのである。あの青年たちにとって、祖国・自由・命令・犠牲・連帯といった言葉は、その背後に偉大な詩の伝統、偉大な精神の力を秘めた何かなのだ。それだから、歴史の現実的な力と直面すると、敗北し滅びてしまう。」（『アンジェイ・ワイダ自作を語る』、平凡社）。初期三部作ではこのロマン主義の表現に成功していましたが、その後、この傾向を追及するあまり、登場人物のスケールが大きくなりすぎ、作品が大ざっぱな印象しか与えなくなったと思います。

また余談ですが、ワイダとロマン主義を語るとき、よく指摘されるのが、ワイダ作品における女性のイメージです。彼の作品の中には、イタリア、フランスなど他のヨーロッパ諸国の映画に登場するような、コケティッシュな女性、魔性的な女性などは一切登場しません。高いモラルを持ち、忍耐強く、勇敢に行動し、男性の主人公を支える存在として描かれています。「地下水道」の中で傷ついたヤツェックを助けるディジー、「大理石の男」、「鉄の男」で権力に立ち向かう映画監督の卵アグネシカ、また「カティン」の主人公である将校の妻などは、同じ系譜に属する女性です。そのルーツを、ワイダも映画化したミツキェヴィチの「パン・タデウシュ」のヒロインのゾーシャであるとか、また少し大げさですがチェンストホーヴァの「黒い聖母」と関連づける批評家もいますが、それよりも父の帰りを信じ待っていた母の姿という身近なイメージが利用されているのではないかと思います。

「地下水道」より

またワイダのポーランド史に対するロマン主義的態度は、ポーランド人以外の観客の理解を妨げ、また時には誤解を招くこともあります。それが顕著に現れたのが、彼の作品「コルチャック先生」がフランスで「反ユダヤ的」というスキャンダルを引き起こした事件です。この映画はよく知られているように、ユダヤ系のポーランドの教育家であり児童文学の作家ヤヌシュ・コルチャックが、自ら開設した孤児院の子供たちと一緒に強制収用所に送られる姿を描いたものです。ホロコーストについてのドキュメント映画「ショアー」を撮ったクロード・ランズマンなどが中心となり、ワイダの作品を、卑劣なナチスと従順なユダヤ人しか登場せず、ひとりのポーランド人も描かれていないと非難しました。ユダヤ人を救わなかったポーランド人の罪を、ナチスに抵抗しなかったユダヤ人になすりつけていると言うのです。それに言い訳するようにその五年後にワイダは、ユダヤ人女性を助けるために命を落とすポーランド人青年を描いたアンジェエフスキィ（「灰とダイヤモンド」の原作者でもあります）の小説「聖週間」を映画化しますが、この作品はフランスでは黙殺されたようです。ポーランド人の歴史を忘却から救うという芸術家としての社会的責務の念が強すぎるあまり、それが作品にあまりにもナイーヴな形で表現されてしまうのです。彼の映画の題材はとても広いですが、一貫しているのは、「ポーランド的なもの」です。芸術家として自分が撮りたいものを差し置いて、ポーランドの民族と祖国のためという大きなテーマと向

「コルチャック先生」


「ヴィルコの娘たち」

き合ってしまうのが、ワイダの強みと同時に弱さとなっている気がします。

もともとワイダはクラクフの美術大学で画家を志していました。芸術家としての天性は、思想を語るよりも映像で表現することに向いているのだと思います。二十世紀のポーランドの作家イワシュキェヴィチ原作の二本の作品「白樺の林」、「ヴィルコの娘たち」は、ポーランドの田園風景を舞台にした、ノスタルジックな作品で、ワイダの隠れた名作となっています。十九世紀の劇作家ヴィスピャンスキィ原作の「婚礼」、現代作家コンヴィツキィ原作の「愛の記録」など、古いポーランドへの郷愁を描いた抒情的作品に、実は傑作が多いのです。

ワイダの「戦争もの」そして「ポーランド田園もの」をつなぐのが「幼年時代」というテーマだと思います。彼は「愛の記録」に触れ、次のように述べています。「幼年時代というものはみんなそうだとおもいますが、さまざまな形で立ち返る時代ではないでしょうか。私にとってその時代はナイーブでもあり、太陽が光り輝く希望に満ちたときでした。当時目にした全てのものが、心の中につねにのこっています。（中略）それが戦争という過酷な出来事によって、とつぜん破られてしまうのです」（『ワイダの世界―映画・芸術・人生』、岩波ブックレットNo.一〇七）。

この「カティン」という作品を観て、思い出した映画があります。それはフランスのルイ・マル監督の「さよなら子供たち」（一九八七年）です。この映画ではナチス占領下のフランスのカトリック寄宿舎での、フランス人少年とユダヤ人少年の心の交流を描きます。このユダヤ人少年と、彼を匿ったフランス人神父がともにナチスに連れ去られるところでこの映画は終わります。これはルイ・マル自身が体験した個人的出来事の映画化だそうです。ワイダが世界的に注目されることとなった作品「地下水道」も、ルイ・マルのデビュー作「死刑台のエレベーター」も期せずしてともに一九五七年製作の作品です。ヌーヴェル・ヴァーグの旗手として実験的な作品を多く作ってきた映画作家も、亡くなる七年前になってようやく幼年時代に体験した「とてもパーソナル」な題材を取挙げることが出来たのでしょう。少年時代という多感な時期に戦争を体験し、その後ヌーヴェル・ヴァーグやネオ・リアリズムといったヨーロッパ映画の影響を受けながらも、晩年に非常にシンプルな表現形式で、個人的なテーマと向き合ったということに、ふたりの芸術家の共通性を感じます。

ルイ・マル監督「さよなら子供たち」

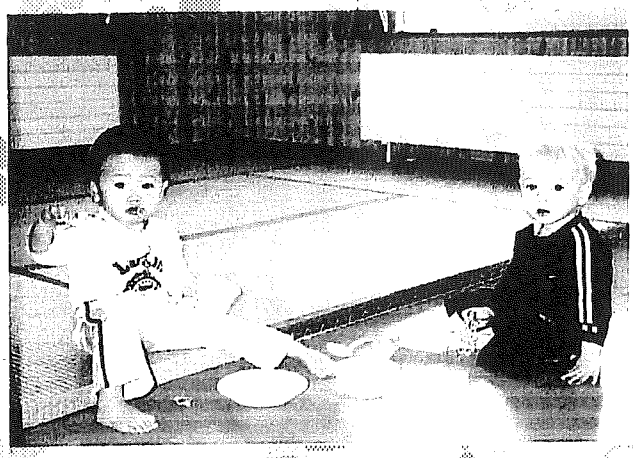
カティンという歴史的事件とワイダの家族の出来事を交互に描く熟練した語り、俳優たちの素晴らしい演技による抑制的な表現、クラクフの街角の風景を映し出す美しい映像（ヨーロッパ映画で初めて4Kという最新の画像処理を行っているそうです）など、監督としての才能を出し切った傑作に仕上がったと思います。それまでの作品で断片的に現れながら、本当には語られなかった出来事についての映画を完成させたワイダを祝福するとともに、この作品の札幌での一日も早い公開を待ちたい。

ポーランドの道産子

エディータ・ジェプカ

ミコワイがまだ小さく、一日のほとんどの時間を一緒に過ごしたときのことを、今でもなつかしい思いで憶えています。一緒に児童会館や公園に通ったり、家で遊んだりしました。しかしミコワイが一才六ヶ月だったとき、もう一度北海道大学でポーランド語を教えないかと提案され、迷わずそれを引き受けました。というのも三年前にポーランド語の授業を行い、教えるのがとても好きだったからです。しかしその授業は知人の佐光伸一さんの大きな助けがありました。私がポーランド語で話し、彼が私のことばを学生に対し日本語に通訳してくれました。しかし今度はもうひとりだけで、そして日本語で授業を行わねばなりません。再び私は日本語学校のコースに登録しました。そこで私が学び働いているとき、ミコワイをどうするかという問題が生じました。

ポーランドでは家庭の経済的事情から女性は働くことを余儀なくされています。もちろんまったく働く必要がないのに、単に働きたいから働いているポーランド女性もいます。そのような女性は出産の数ヶ月前まで働きます。出産後、若い母親には十六週間の有給の産休を取る権利があります。その後、女性は職場に戻るかあるいはいわゆる育児休暇を取るかします。育児休暇は三年間取ることが出来ますが、残念ながら無給休暇です。したがって現在のポーランドでは母親が育児休暇を取るのは稀で、ほとんどの場合十六週間の産休の後、職場に戻ります。そしてそこでも幼い子供をどうするかという問題が生じます。ポーランドではこのような状況では三つの選択肢があります。第一にもっともよく行われているのが、おばあちゃんが毎日孫の面倒を見るということです。そうすると両親が働くことが出来るからです。もしおばあちゃんが手伝えない場合、たとえばおばあちゃん自身が働いている場合、あるいは遠くに住んでいる場合、二番目の多いのがベビーシッターを雇うことです。最近ポーランドではベビーシッターという仕事はとても人気があります。それは学校や何かのコースで勉強しないといけないような仕事ではなく、ポーランドではどんな資格も持たず誰でもなることが出来ます。新聞に広告を出せばいいのです。ベビーシッターになるのが最も多いのが、仕事を持たな五十才前後の女性です。こういったベビーシッターは、面倒を見る子供の家に通い、両親が帰ってくるまで一緒にいてくれます。もちろん子供と遊び、食事の世話をし、一緒に散歩にも行ってくれます。三つ目の選択肢が、〇才から三才までの保育園です。しかしポーランドで保育園はあまり評判がよくありません。もし若い母親が職場に戻らなければならないなら、おばあちゃんに預けられることが一番多く、そのつぎがベビーシッター、最後に保育園です。



わたしたちの日本での状況の結果、ミコワイを保育園に入れざるをえませんでした。というのもおばあちゃんはわたしたちと一緒にはいないし、ベビーシッターはここでは人気がありません。そのとき、日本には幼稚園（三才から六才までの子供、ポーランドの幼稚園と同じ）そして保育園（生後一ヶ月から六才まで、つまりポーランドの保育園と幼稚園をひとつにあわせたもの）があることを知

りました。地域の役所に、夫が働き、私も働き勉強をしているという届けを出し、保育園を選べばいいだけです。私たちの住まいの近くには三つの保育園がありました。その三つの保育園に出かけ、そして園長先生と話し合った後、その内のひとつに決めました。それは一番遠くにありましたが、私たちにはそこが一番いいように思いました。最後の瞬間まで、つまりミコワイがはじめて保育園に行く日まで、私はこの決断が正しかったのかどうか、私たちの子供はまだ幼すぎないかなど大きな不安にとらわれ、悩みました。しかし私たちの心配はまったくの杞憂だったと後で分かりました。四月になり私は仕事と勉強に戻り、ミコワイは自分の人生の新しいステップを始めました…

次回コンサートのお知らせ

昨年五月の二十周年記念コンサートでは、会員の皆様に多大なご協力を頂き、ありがとうございました。当協会では、今後も毎年一回のコンサートを開催し、ショパンなどポーランドの作曲家の作品、また広くポーランドに関わりのある作品を演奏、紹介してゆく予定です。また皆様から、演奏曲目についてのご要望、演奏のご希望など随時受け付けておりますので、どうぞお気軽にお問い合わせ下さい。さて、次回のコンサートですが、下記の日程で準備中です。皆様のご来聴をお待ちしております。

時：二〇〇九年五月二十九日（金）六時開演予定

所：札幌サンプラザホール（札幌市北区北二十四条西五丁目）

プログラム：ショパン、リャードフなど（現在チラシを印刷中です。詳しいプログラムはチラシをご覧下さい。）

北海道ポーランド文化協会の皆様へ

〇八年五月、ポ文協創立二十周年を記念して音楽関係の会員に拠る演奏会を致しましたところ、運営委員の皆様を始として会員の皆様の絶大なるご協力の下、成功裡に終える事が出来、本当に有難うございました。

これを機に、会員に拠る演奏会の定期化が決まりましたが、何分にも演奏会実施には長期に亘る準備期間と多額な金額が必要となります。そこで、ポ文協演奏部門として演奏会準備委員会が中心になり企画運営し、基本的には独立採算を目指す方向でお願い致しましたところ、運営委員の皆様に御賛同頂き、総会でも御了承頂き、早速来年の準備に入りました。

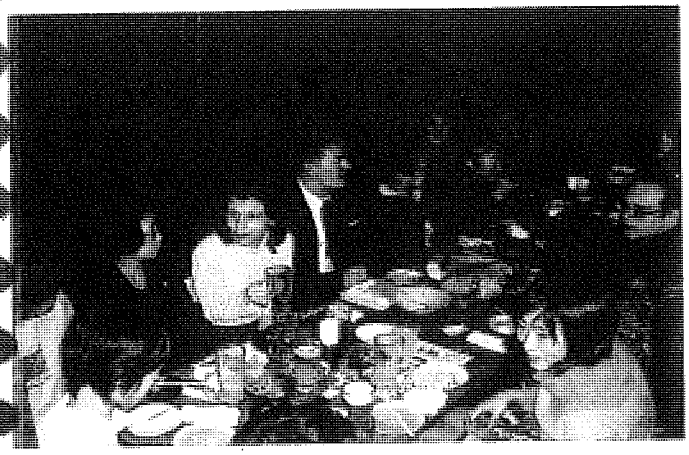
演奏部門等大袈裟な名前が付きましたが、あくまでもポ文協の活動の一部で有り、会員の皆様のご協力無しには充実した演奏会には出来ません。くれぐれも会員皆様の暖か間御支援、ご協力を御願い申し上げます。

北海道ポーランド文化協会・演奏会準備委員会一同

北海道ポーランド文化協会第五十四回例会報告

二〇〇九年二月七日に開催された当協会の第五十四回例会をかでる二・七にて行いました。今年は日本、ポーランド国交樹立九十周年という記念すべき年にあたり、記念事業として在日ポーランド共和国大使館との共催で、大使館より二等書記官のラデック・ティシキェヴィチ氏を向かえ、アンジェイ・ワイダ監督の最新作「カティン」の上映会を行いました。

当日は五十名近くの方が参加し、ワイダの最新作を観賞しました。上映後、ラデックさんから映画に関する解説がありました。ご自身の親戚の中にもカティンの森の犠牲者がいるということで、亡くなられた叔父さんの写真を見せてくださりました。カティンの事件がポーランド人に残している傷跡について身近に感じることが出来ました。その後、ラデックさんと参加者の方々とのフリートークになりました。「このことでロシアは正式に謝罪したのか？」、「ソ連がドイツとの不可侵条約を破ったことをポーランドではどう評価するか？」、「ポーランド人にとっての国境に対する意識はどのようなものか？」など、議論も非常に盛上りました。例会の後は近くの居酒屋でラデックさんを囲み懇親会を行い、参加者の方々はポーランドに対する熱い思いを語ってくださいました。



2008年度会計決算書（自2007年10月1日～至2008年9月30日）

単位：円

【収入の部】	予　算	収支・支出済み	内　訳
会　費	200,000	123,140	全額の50%
その他	0	1,686	懇親会費
小　計	200,000	124,826	
繰越金	81,177	81,177	
合　計	281,177	206,003	
【支出の部】			
事業費	100,000	11,130	例会、総会
連絡費	60,000	37,120	ポーレ発送,はがき・切手他
編集費	30,000	4,859	ポーレ制作費，文房具等
会合費	10,000	20,790	運営委員会他
事務費	10,000	10,000	人件費
予備費	20,000	0	
小　計	230,000	83,899	
繰越金	51,177	122,104	
合　計	281,177	206,003	

北海道ポーランド文化協会二〇〇八年度総会が二〇〇八年十一月二十八日かでる二・七（中央区北二条西七丁目　一〇五〇会議室）で開かれました。

総会

開会のあいさつ

議事

Ⅰ　二〇〇八年度事業および決算報告、監査報告

Ⅱ　二〇〇九年度事業計画（案）と予算（案）について

Ⅲ　二〇〇九年度役員について

Ⅳ　その他

懇親会

開会挨拶と乾杯会食、閉会の挨拶、乾杯－Sto lat

Ⅰ　二〇〇七年度事業および決算報告、監査報告

《主催事業》

1）創立二十周年ピアノコンサート（二〇〇八年五月十七日、サッポロコンサートホールキタラ小ホール）

2）第五十三回例会「ポーランドの過去と現在」

お話：ラファウ・ジェプカさん（二〇〇七年七月二十六日、北海道大学クラーク会館3階国際交流室、参加者約三〇名）

《ポーレ発行》　第六十三号（二〇〇八年六月二〇日）

《第二十一回総会》　二〇〇七年十一月二十八日北海道情報大学サテライト

《運営委員会》　第一回二〇〇八年二月七日、第二回二〇〇八年六月十六日、第三回二〇〇八年一〇月二十七日

《二〇〇八年度決算報告》【資料上段】をご覧ください。

《監査報告》二〇〇八年十一月二十七日に二〇〇八年度の会計処理について監査を実施したので報告いたします。

Ⅱ　二〇〇九年度事業計画（案）と予算（案）について

《主催事業》

・ピアノコンサート（五月、六月頃）、料理講習会、講演会（「コルチャック先生」など）

《ポーレ発行》　年三回

《第二十四回総会》　二〇〇八年一〇月頃

《運営委員会》必要に応じて随時開催

《二〇〇九年度予算（案）》

Ⅲ　二〇〇九年度役員案について

会長・・安藤厚

副会長・・小笠原正明

顧問・・遠藤道子、谷本一之

運営委員・・安藤むつみ・薄井豊美・小笠原正明・栗原朋友子・越野剛・小林暁子・小林美保・斎田道子・佐々木保子・佐光伸一・霜田千代麿・富山信夫・中島洋・鳴神雅史・灰谷洋子・三浦洋・渡辺卓・ラファウ・ジェプカ

ポーレ編集委員・・越野剛・小林美保・佐光伸一・鳴神雅史・ラファウ・ジェプカ　DR安藤

ピアノコンサート企画委員・・安藤むつみ・ウィリアムス美由紀・小林美保・高橋健一郎・本田真紀子・渡辺卓

監査委員・・栗原成郎、吉野悦雄

事務局長・・佐光伸一

事務局委員・・ラファウ・ジェプカ

会費の納入はお済みですか？

2009年度（2008年 10 月～2009年 9 月分）

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。
上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

「ポーレ」編集委員会
越野剛・小林美保・佐光伸一・
鳴神雅史・ラファウ・ジェプカ
Tel/Fax ０１１－７２７－１５２０
〔連絡先〕 佐光

《郵便振替口座》
02740 － 5 － 19735
北海道ポーランド文化協会
普通会員（年　額）　3,000円
維持会員（年額1口）5,000円
学生会員（年額）　1,500円

《会費振込銀行口座》
北洋銀行 大通支店
（普）301-0605084
北海道ポーランド文化協会
事務局長佐光伸一

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 64 号（2009 年 3 月）

目　　次

佐光伸一「アンジェイ・ワイダ監督『カティン』を観て」 1
エディータ・ジェプカ「ポーランドの道産子（７）」 5
次回コンサート[ショパン、リャードフなど]のお知らせ、北海道ポーランド文化協会の皆様へ
（演奏会準備委員会一同） 6
〈第 54 回例会報告〉アンジェイ・ワイダ監督「カティン」上映会 [2009.2.7] ／ [第 22 回 2008−2009 年度] 総会報告 [2008.11.28] 7